

運動部活動経験と徳性の強みの関係 —日本版生き方の原則調査票を用いて—

霜鳥駿太*^{1,2}・木内敦詞*³・西田順一*⁴・
中雄勇人*⁵・松岡弘樹*⁶

Relationship between Sports Career and Character Strengths in College Students:
Using the Japanese Version of the VIA-IS

Shunta SHIMOTORI*^{1,2}, Atsushi KIUCHI*³, Jun-ichi NISHIDA*⁴,
Hayato NAKAO*⁵ and Hiroki MATSUOKA*⁶

The purposes of this study were 1) to examine the reliability and validity of the Japanese version of the VIA-IS (VIA-IS-J; Ohtake et al., 2005) and 2) to clarify the relationship between sport career pattern and character strength (CS) using the scale. Study 1 examined model fit, internal consistency, reproducibility, and concurrent validity based on data from 828 Japanese university students' responses to the scale. As a result, the reliability and validity of the scale were confirmed to be within acceptable limits. In the Study 2, the VIA-IS-J was used to examine the relationship between CS and sports career pattern among college students. The results showed that "courage" was significantly higher in both males and females, and "knowledge and wisdom," "human nature," and "transcendence" were significantly higher only in males than in females who had continuously engaged in the same sport in middle and high school. These results suggest the reliability and validity of the VIA-IS-J and the relationship between sports career pattern and CS.

key words: Values in Action Inventory of Strengths (VIA-IS), positive psychology, sports career pattern

*1 帝京大学冲永総合研究所

Okinaga Reserch Institute, Teikyo University, Hirakawacho Mori Tower 9th floor, 2-16-1 Hirakawacho, Chiyodaku, Tokyo 102-0093, Japan.
(s.shunta@main.teikyo-u.ac.jp)

*2 筑波大学大学院大学体育スポーツ高度化共同専攻

Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574, Japan.

*3 筑波大学体育系

Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574, Japan.

*4 近畿大学経営学部

Faculty of Business Administration, Kindai University, 3-4-1 Kowakae, Higashiosaka, Osaka 577-8502, Japan.

*5 群馬大学共同教育学部

Cooperative Faculty of Education, Gunma University, 4-2 Aramaki, Maebashi, Gunma 371-8510, Japan.

*6 筑波大学スポーツイノベーション開発研究センター

Sports Innovation Research & Development, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574, Japan.

問題と目的

1. ポジティブ心理学への注目

21世紀の心理学の主な研究対象は、肯定的な感情や幸福感、人の長所や強みの育成を掲げるポジティブ心理学へと移行してきた (Seligman & Csikszentmihalyi, 2000)。この心理学研究の流れと同様に、スポーツ心理学においてもポジティブな心理的側面の向上を意図した研究が進んでいる。例えば、スポーツ活動によるライフスキルの獲得 (上野・中込, 1998; 島本・石井, 2010) やレジリエンスの促進 (上野他, 2014; 上野・小塩, 2015) 等のスポーツ活動のポジティブな心理的側面に焦点をあてた研究知見が挙げられる。このように、スポーツはポジティブな心理的側面との関連が想定されるものの、スポーツの価値をポジティブ心理学からアプローチした研究は、意外にもこれまで進んでいない。

ポジティブ心理学研究の主要な研究分野に、強み (Strengths) があり、6つの美德と24個の強み・長所から構成されている (ピーターソン・宇野, 2012)。本研究では、24個の強み・長所を包括する概念である6つの美德に着目しているため、「徳性の強み」として論を進めることとする。

2. 徳性の強みを測定する尺度の課題

徳性の強みを測定する尺度として Values In Action Inventory of Strengths (VIA-IS; Peterson & Seligman, 2004) が開発され、多くの国の心理学者によって用いられてきた。VIA-ISは哲学書や教典を基に徳性の強みを整理した尺度であり、徳性の強みの保有度を認識することを可能にしている。さらにVIA-ISの翻訳版尺度である「日本版生き方の原則調査票 (大竹他, 2005)」(以下、日本版VIA-ISと呼ぶ) も作成された。24個の強み・長所 (独創性、好奇心・興味、判断、向学心、見通し、勇敢、勤勉、誠実性、熱意、愛する力・愛される力、親切、社会的知能、チームワーク、平等・公平、リーダーシップ、寛大、謙虚、思慮深さ・慎重、自己コントロール、審美心、感謝、希望・楽観性、ユーモア・遊戯心、精神性) は、それぞれが属する6つの領域 (知恵・知識、勇気、人間性、正義、節度、超越性) に整理されている (大竹他, 2005; ピーターソン・宇野, 2012)。

なお、近年ではVIA-ISの24個の強み・長所を3つの領域 (caring, inquisitiveness, self-control) と

して活用されているが、3つの領域ではすべての強み・長所を測定できない可能性があること、統計解析によるモデル適合度に基づかない単純化されたモデルであることが研究の限界とされている (McGrath, 2015)。

VIA-ISとその翻訳版尺度である「日本版VIA-IS」には、両尺度とも検討すべき課題として、統計技法を経た構成概念妥当性が検証されていない点が指摘されている (大竹他, 2005)。そのため、構成概念妥当性を検証したうえで本尺度を用いる手続きが必要である。

3. スポーツ経験としての運動部活動経験への着目

徳性の強みを育み強化するためには、徳性の強みを普段の生活の中で活用することの重要性が指摘されている。例えば、Seligman et al. (2005) は、自己の保有する上位5つの徳性の強みを新たな方法で活用することで、抑うつ感の減少と幸福感の増大がみられたことを報告している。また、高校生を対象に自己の上位5つの徳性の強みを授業や部活動などの学校生活や、アルバイト、自分の趣味で意識的に活用することで自己形成意識を高めたとしている (森本他, 2015)。徳性の強みの向上はさらに、不安を自己対処する心を養うことにつながり、精神病理的問題への予防や健康増進への効果も指摘されている (島井, 2006) ことから、徳性の強みの向上は意義あるものと考えられる。そしてその徳性の強み向上の方略として考えられるのが、スポーツへの参加 (スポーツ経験) である。なぜなら、徳性の強みの構成概念である勇敢、勤勉、熱意等は、スポーツでの日々の練習に取り組む上で必要であり、チームワーク、リーダーシップ等はパフォーマンスの発揮にも必須と考えられる (霜鳥他, 2018) からである。また、大学体育授業においても、多くの徳性の強みが育まれると学生が評価していることが明らかにされている (橋本他, 2020)。

しかし、徳性の強みとスポーツ経験の関係を調査した研究は少なく不明点が多い。その手がかりとして、徳性の強みを内包するパーソナリティとスポーツの関係に関する研究は参考になると考えられる。例えば、スポーツマン的性格は、「健康的である」「忍耐力がある」「明朗である」とされている (花田他, 1966)。また、Big Five パーソナリティ特性と競技力の関係では、協調性や勤勉性が競技レベルの高低に

関係することが報告されている(高岡・佐藤, 2014; 上野他, 2018)。このように, スポーツ経験とパーソナリティ発達の関係が示唆されていることから, スポーツ経験と徳性の強みの関連が予想される。

広義なスポーツ経験を捉える枠組みとして, 学校運動部活動経験が考えられる。これまでも, 運動部活動をスポーツ経験と定義して心理的变化を検証した研究がみられる。心理的ストレスとその対処方略(霜鳥他, 2018), ライフスキルの獲得(上野・中込, 1998; 島本・石井, 2010)等の報告から, 運動部活動の性格形成への寄与が推察される。例えば, 大学期のライフスキル(以下: LS)と課外活動の関係において, LS得点の差異が, 男性と女性, 体育会所属者と文化会所属者および無所属者, 体育会所属者の競技種目(個人系・集団系等)でみられたこと(平井他, 2012)から, 高校までの課外活動経験を考慮することの必要性が考えられる。さらには, スポーツキャリアパターンの研究では, 競技種目の継続型(同一種目継続型・異種目継続型等)により心理的変数(結果予期, 効力感, 勝利志向性等)に差が生じることが明らかにされている(筒井他, 1996; 富永・田口, 2014; 字恵・辰本, 2016)。これら先行研究から, 本研究においても, 性差や部活動の種類, スポーツ種目やその継続性により, 徳性の強みに差異が生じることが予想される。

そのため, スポーツ経験を運動部活動の枠組みで捉え, 性差や部活動の種類(運動部・文化部), スポーツ種目の継続型(同一種目継続型・異種目継続型), 種目系統(個人系・集団系)と徳性の強みとの関係を探ることは, 学校における運動部活動の意義を検証する意味において重要である。

4. 本研究の目的

以上より本研究の目的は, 日本人大学生の徳性の強みを運動部活動経験から捉えることであった。研究1では, 日本版 VIA-IS から大学生 828 名の徳性の強みを評価し, 確認的因子分析を行う。続く研究2では, 大学生の徳性の強みと運動部活動の関係を検討する。なお, 本研究では運動部活動経験を, 中高継続して運動部活動に取り組んだ者の種目の継続型(同一種目継続型・異種目継続型)および系統(個人系・集団系)と捉えた。

研究 1

目的

先行研究における日本版 VIA-IS は, 因子構造に関する検討が不十分な点において検討が望まれる。そこで研究1では, 日本版 VIA-IS の質問項目(公開されている 48 項目)を用いて構成概念妥当性を検討することを目的とした。

方法

調査対象と調査実施時期 関東地方にある国立 A 大学と公立 B 大学の一般体育授業履修学生 837 名を対象とした。A 大学の体育授業は必修科目, B 大学は選択科目であった。調査はいずれも最終回授業にて, 授業アンケートとレポート提出を終えた学生に, 自由意思に基づく研究参加協力を依頼した。

倫理的配慮 本研究は, A 大学研究倫理委員会の承認を経て実施された(体 019-162)。なお, 調査協力の依頼に際しては, 1) 研究対象者の自由意思に基づく研究参加であること, 2) 研究協力しない場合も不利益を一切被ることのないこと, 3) 調査用紙の提出をもって同意とみなすこと, 4) 同一学生からの回答を紐づけるために学籍番号の情報を得ること, を口頭および文書によって説明した。

調査内容 既存の徳性の強みを測定する尺度である日本版 VIA-IS の 48 項目を用いた。各項目について, 「1.全くあてはまらない」から「5.とてもよくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。加えて, 基本属性(大学名, 学部名, 性別, 年齢)と過去の部活動経験(部活動名, 種目, 実施時期)の調査を実施した。

併存的妥当性を検討するにあたり, Big Five の 5 つの次元「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」を測定する「日本語版 Ten Item Personality Inventory」(TIPI-J; 小塩・阿部, 2012) 10 項目(7 件法)を分析に用いた。その理由として, 日本版 VIA-IS は, ポジティブな側面を測定するため, 「外向性」「協調性」「勤勉性」「開放性」との正の相関, 「神経症傾向」との負の相関が予想される TIPI-J との関連をみることが併存的妥当性の検証に適していると考えたからである。

統計処理 調査で収集された項目の得点について, 確認的因子分析による因子構造の妥当性の検討を行った。統計処理には, SPSS Statistics 25.0 及び SPSS Amos 25.0 を用いた。

結果および考察

調査対象者 調査対象者 837 名の中から記入漏れのあった者を除いた 828 名(平均年齢 19.02 歳, 標準偏差 0.74 歳: 男性 469 名, 女性 359 名: 有効回答率 98.9%) の有効回答が得られた。

再検査法による信頼性の検討および併存的妥当性の検討においては, A 大学, B 大学の一般体育授業履修学生のうち, 2 度の調査に不備なく回答した 80 名を対象とした。2 度目の調査は 1 度目の調査の約 3 週間後に実施された。

日本版 VIA-IS の確認的因子分析 モデルデータへの適合度を確認的因子分析により検討したところ, 適合度指標は, やや低い値であった ($X^2=3875.016$, $df=1041$, $p<.001$, $GFI=.806$, $AGFI=.781$, $CFI=.746$, $RMSEA=.057$)。そこで, モデルの意味が損なわれないよう, 修正指標に基づきモデルを修正した。その結果, 適合度指標は, $X^2=3542.970$, $df=1036$, $p<.001$, $GFI=.829$, $AGFI=.806$, $CFI=.776$, $RMSEA=.054$ となり, モデルが改善された (Figure 1)。GFI, AGFI, CFI の値は 1 に近いほど適合度が高く, 一般的に 0.9 以上が目安 (小塩, 2018) であるが, 本研究では GFI, AGFI, CFI ともに若干低い値であったものの, おおよそ説明力があるモデルと判断した。RMSEA については, 0.05 以下であれば当てはまりが良いと判断される (小塩, 2018) が, 本研究では $RMSEA=.054$ と近似値であったことから, 適合度は許容範囲内であると判断した。

内部一貫性の検討 各因子のクロンバックの信頼性 α 係数を確認したところ, 第 1 因子「知識と知恵」 $\alpha=.78$, 第 2 因子「勇気」 $\alpha=.63$, 第 3 因子「人間性」 $\alpha=.68$, 第 4 因子「正義」 $\alpha=.75$, 第 5 因子「節度」 $\alpha=.58$, 第 6 因子「超越性」 $\alpha=.77$ となった。全ての因子を合わせた信頼性 α 係数=.89 であった。

再検査法による検討 1 度目の調査と 2 度目の調査の得点間の相関係数を求めたところ, 尺度全体では $r=.86$, 「知恵と知識」 $r=.81$, 「勇気」 $r=.75$, 「人間性」 $r=.65$, 「正義」 $r=.77$, 「節度」 $r=.52$, 「超越性」 $r=.77$ (いずれも 1% 水準で有意) であった。強い相関がみられたことから, 日本版 VIA-IS の高い再現性が確認された。

併存的妥当性の検討 日本版 VIA-IS の下位因子と TIPI-J の下位因子の「神経症傾向」に負の相関がみられた (Table 1)。TIPI-J の下位因子の「神経症傾

向」は, 不安や心配など内的な要素を測定する (小塩他, 2012) ため, 徳性の強みを測る日本版 VIA-IS と負の相関があることは妥当である。また, 日本版 VIA-IS の下位因子の「節度」と TIPI-J の下位因子に相関がみられなかったことは, 本研究の特徴である。

「節度」は, 寛大, 謙虚, 思慮深さ・慎重, 自己コントロールの強み・長所から構成されているため, TIPI-J の下位因子では測定できない概念を測定していると考えられ, 併存的妥当性を裏付けるものと思われる。

結論

研究 1 では, 日本版 VIA-IS の 48 項目を用いて尺度の信頼性と妥当性を検討した。その結果, 許容範囲内の信頼性と妥当性が確認された。

研究 2

目的

研究 2 では, 研究 1 で許容範囲内の信頼性と妥当性を確認した日本版 VIA-IS を用いて, 徳性の強みの得点パターン (得点の高低) を検討した後に, 徳性の強みとスポーツ経験, すなわち中高継続して運動部活動に取り組んだ者の種目の継続型および系統による関係を明らかにすることを目的とした。

方法

調査対象者 研究 1 の調査にて有効回答を得た 828 名を対象とした。なお, 部活動経験と日本版 VIA-IS の得点の分析については, 中学校および高校で継続して部活動に取り組んだ者 664 名 (平均年齢 19.00 歳, 標準偏差 0.66 歳: 男性 383 名, 女性 281 名) を対象にした。

倫理的配慮 研究 2 についても, 研究 1 と同様に A 大学研究倫理委員会の承認を経て実施された (体 019-162)。

調査内容 研究 2 の調査内容については, 研究 1 と同様であった。

統計処理 日本版 VIA-IS の得点について, 部活動経験 (中高とも運動部, 中高とも文化部, 中学のみ運動部) と徳性の強みの関係を探索的に検討するため, クラスタ分析 (ward 法) とカイ二乗検定を行った。なお, 中学のみ文化部の者は 9 名と極端に少ないため, 分析から除外した。加えて, 部活動経験 (運動部・文化部) と性別 (男性・女性), 男女別による種目の継続型 (同一種目継続型・異種目継続型) と

Figure 1 日本版 VIA-IS の確認的因子分析

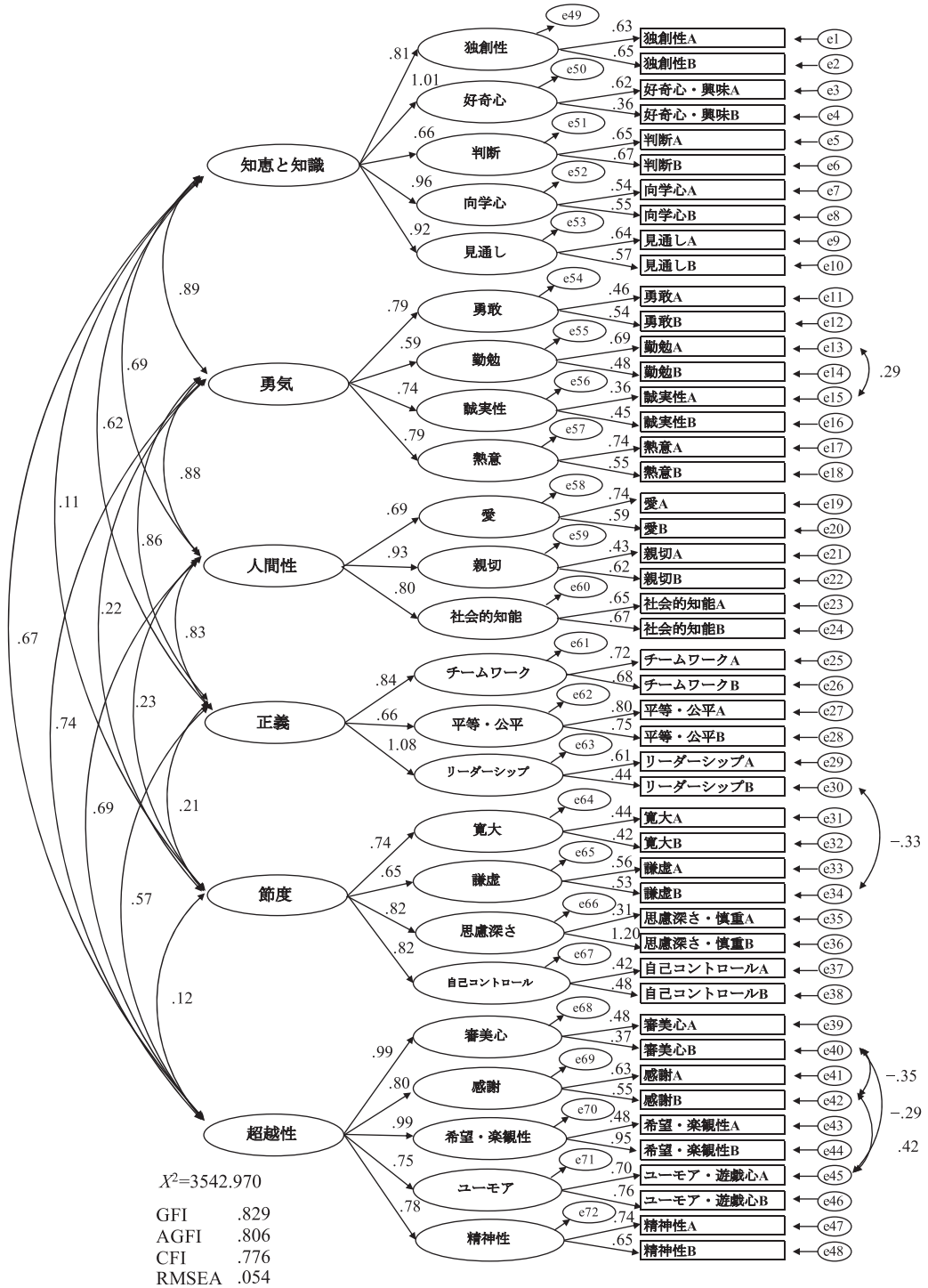
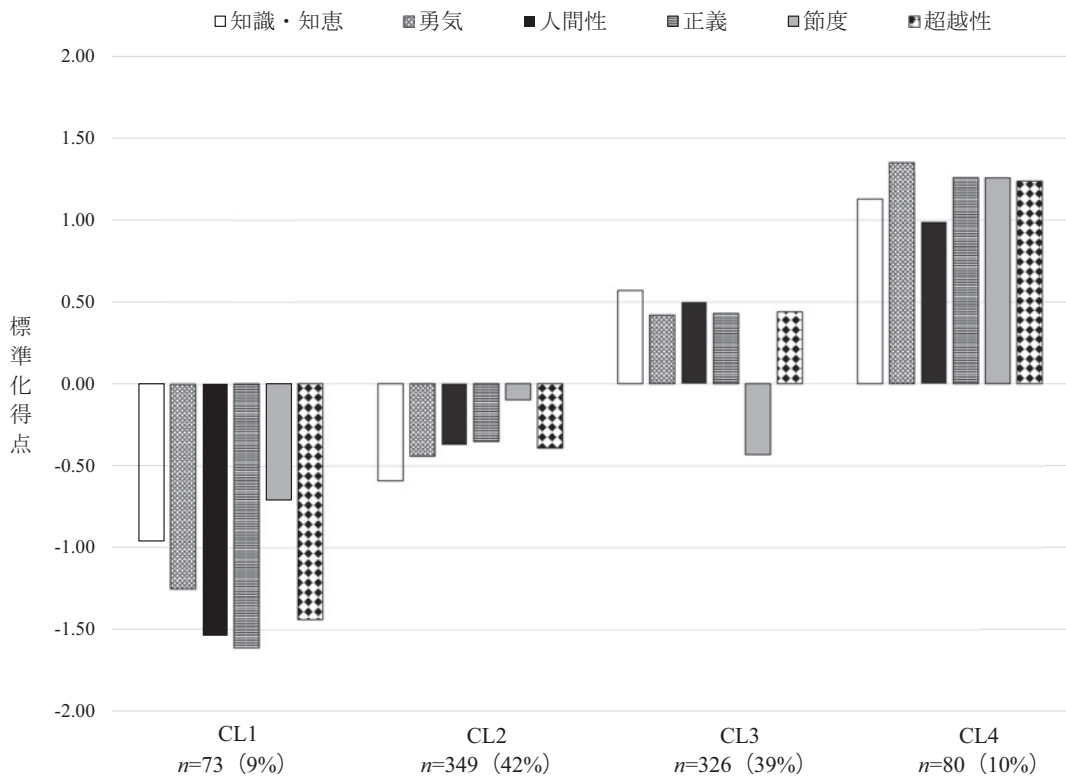


Table 1 日本版 VIA-IS と基準関連尺度との相関

領域	Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)				
	外向性	協調性	勤勉性	神経症傾向	開放性
知識・知恵	.32**	.37***	.18	-.38***	.49***
勇気	.40***	.27*	.43***	-.24*	.31**
人間性	.32**	.53***	.07	-.33**	.25*
正義	.27*	.42***	.15	-.27**	.36***
節度	-.08	.18	.09	-.09	-.05
超越性	.27*	.35***	.13	-.23*	.47***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure 2 クラスター分析の結果 (n=828)



系統(個人系・集団系)の二要因分散分析を行った。多重比較については、Bonferroni法を用いた。

結果および考察

徳性の強みの得点パターンの類型化 ポジティブな徳性の標準化得点を用いて、クラスター分析を行った。デンドログラムの形状を確認し、クラスターの解釈可能性の観点から4つのクラスター (CL1からCL4) が適切であると判断した (Figure 2)。CL1は全ての徳性が最も低い群、CL2は全ての徳性が低い群、CL3は「節度」のみ低い群、CL4は全ての

徳性が最も高い群であった。

続いて、4つのクラスターによる徳性の強みの得点の一要因分散分析の結果を Table 2 に示した。全ての徳性の得点において有意差がみられ、Tukey法による多重比較により、「節度」を除き、CL4、CL3、CL2、CL1の順に得点が高いことが示された。

これらの結果から、各徳性が相互に関係していることが示唆された。特に「節度」の得点が他の徳性に関係しているかもしれない。

部活動経験と徳性の強みの関係 部活動経験と4

Table 2 クラスター別の各因子の平均値 (標準偏差), 分散分析の結果 ($n=828$)

領域	CL1 ($n=73$)	CL2 ($n=349$)	CL3 ($n=326$)	CL4 ($n=80$)	F 値	多重比較
知恵と知識	24.71 (6.90)	26.83 (3.83)	33.37 (3.49)	36.58 (4.12)	251.46***	CL1<CL2<CL3<CL4
勇気	18.82 (4.08)	22.19 (2.97)	25.80 (2.82)	29.70 (3.31)	239.94***	CL1<CL2<CL3<CL4
人間性	14.81 (2.89)	19.16 (2.78)	22.44 (2.71)	24.26 (2.69)	235.16***	CL1<CL2<CL3<CL4
正義	12.86 (3.05)	17.77 (2.58)	20.81 (2.84)	24.04 (2.75)	282.16***	CL1<CL2<CL3<CL4
節度	22.18 (4.59)	24.66 (3.54)	24.90 (3.64)	30.26 (3.38)	70.26***	CL1<CL2, CL3<CL4
超越性	23.45 (4.82)	29.72 (4.05)	34.71 (4.64)	39.50 (4.23)	243.82***	CL1<CL2<CL3<CL4

*** $p<.001$ **Table 3** クラスター別の部活動継続者数 (割合), 調整済み残差 ($n=788$)

	CL1	CL2	CL3	CL4
中高運動部	45 (8)	223 (41)	220 (41)	54 (10)
残差	0.3	-1.4	0.6	1.0
中高文化部	10 (8)	45 (37)	56 (46)	11 (9)
残差	0.0	-1.4	1.5	-0.1
中のみ運動部	9 (7)	69 (56)	38 (31)	8 (6)
残差	-0.4	3.2	-2.3	-1.2

 $X^2(6) = 11.45, p < .10, V = .01$

※中学のみ文化部の者はサンプル数が極端に少ないため, 分析対象から除外した。

Table 4 部活動と性別による各因子の平均値 (標準偏差) および分散分析の結果 ($n=664$)

領域	男性 ($n=383$)		女性 ($n=281$)		主効果 (F 値)		交互作用 (F 値)
	運動部 ($n=358$)	文化部 ($n=25$)	運動部 ($n=184$)	文化部 ($n=97$)	性別	部活動	
知恵と知識	30.34 (5.71)	30.08 (6.59)	30.05 (5.18)	30.55 (5.13)	0.02	0.03	0.31
勇気	23.87 (4.35)	22.56 (5.24)	24.55 (3.88)	24.53 (3.43)	6.97**	1.78	1.66 男性<女性
人間性	20.12 (3.74)	19.16 (4.60)	21.57 (3.31)	21.62 (3.32)	20.15***	1.10	1.34 男性<女性
正義	19.28 (3.81)	18.08 (5.14)	19.55 (3.71)	19.28 (3.60)	2.55	2.54	1.01
節度	25.19 (4.24)	25.84 (4.11)	24.82 (3.91)	24.86 (3.92)	1.86	0.48	0.39
超越性	31.54 (6.01)	30.64 (8.19)	33.32 (5.27)	33.93 (5.57)	12.84***	0.04	1.14 男性<女性

** $p<.01$, *** $p<.001$

※中学校および高校で継続して部活動に取り組んだ者を分析対象とした。

つのクラスターのカイ二乗検定の結果, 有意傾向であるものの残差分析を行った。その結果, 中学のみ運動部に所属した者は, CL2(全ての徳性が低い群)に多く, CL3(節度のみ低い群)に少ないことが示された(Table 3)。つまり, 中学校のみ運動部に所属した生徒は, 徳性が低い群に分類されることがわかった。

部活動経験による日本版 VIA-IS の得点の差 部活動経験(運動部・文化部)×性別(男性・女性)の二要因分散分析の結果を Table 4 に示した。いずれ

の因子についても交互作用はみられなかった。性別による主効果は, 「勇気」($F(1, 66) = 6.97, p < .01, \eta^2 = .01$), 「人間性」($F(1, 66) = 20.15, p < .001, \eta^2 = .03$), 「超越性」($F(1, 66) = 12.84, p < .001, \eta^2 = .02$) にみられ, すべての因子で, 男性よりも女性の得点が有意に高かった。「人間性」, 「超越性」は, 先行研究(大竹他, 2005)においても性差の確認された項目(愛, 親切, 審美心, 感謝)を含む概念であり, 先行研究を追認する結果といえる。「勇気」について

Table 5 男性における種目の継続型と系統による平均値（標準偏差）および分散分析の結果（ $n=306$ ）

領域	同一種目型 ($n=180$)		異種目型 ($n=126$)		主効果 (F 値)		交互作用 (F 値)	
	個人系 ($n=71$)	集団系 ($n=109$)	個人系 ($n=82$)	集団系 ($n=44$)	継続型	種目系統		
知恵と知識	31.41 (6.80)	31.19 (5.36)	29.44 (4.81)	28.73 (6.22)	10.35***	0.45	0.13	異種目型<同一種目型
勇気	24.77 (4.86)	24.42 (3.89)	23.06 (4.49)	23.18 (4.49)	7.83**	0.05	0.20	異種目型<同一種目型
人間性	21.11 (4.29)	20.59 (3.79)	19.06 (3.04)	19.64 (3.67)	11.23***	0.00	1.51	異種目型<同一種目型
正義	18.87 (4.44)	19.94 (3.45)	18.85 (4.10)	18.59 (3.76)	2.11	0.73	1.99	
節度	25.80 (4.54)	25.12 (4.11)	25.23 (4.50)	24.50 (3.87)	1.33	1.87	0.00	
超越性	32.14 (6.93)	32.62 (5.48)	30.79 (6.15)	30.34 (5.83)	6.15*	0.00	0.41	異種目型<同一種目型

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

※中高において個人系種目と集団系種目の両方を実施した者は分析対象から除外した。

Table 6 女性における種目の継続型と系統による平均値（標準偏差）および分散分析の結果（ $n=158$ ）

領域	同一種目型 ($n=72$)		異種目型 ($n=86$)		主効果 (F 値)		交互作用 (F 値)	
	個人系 ($n=41$)	集団系 ($n=31$)	個人系 ($n=58$)	集団系 ($n=28$)	継続型	種目系統		
知恵と知識	30.83 (5.77)	30.61 (4.26)	29.21 (5.18)	29.71 (4.96)	2.20	0.03	0.18	
勇気	25.63 (4.28)	25.19 (3.42)	23.76 (3.78)	24.11 (3.48)	5.55*	0.01	0.39	異種目型<同一種目型
人間性	21.93 (3.47)	21.71 (3.26)	20.97 (3.27)	21.57 (2.96)	1.03	0.13	0.58	
正義	20.71 (3.87)	19.97 (4.14)	18.41 (3.66)	19.89 (2.70)	3.81	0.37	3.34	
節度	24.98 (4.30)	25.81 (3.96)	24.07 (3.80)	24.86 (3.23)	2.09	1.59	0.00	
超越性	33.73 (4.46)	33.61 (6.71)	32.33 (5.50)	33.50 (4.69)	0.72	0.35	0.53	

* $p<.05$

※中高において個人系種目と集団系種目の両方を実施した者は分析対象から除外した。

は、先行研究(大竹他, 2005)にて女性より男性の得点が高い項目(勇敢)を含んでいるが、本研究では異なる結果となった。この点について、男性より女性の方が「認知的評価」がポジティブであり、複数の徳性の強みを高く評価する可能性がある(橋本他, 2020)ことが一因かもしれない。

続いて、運動部と文化部で各因子の得点に差がみられなかったことについては、どちらの活動も徳性の強みを高める要素を含んでいるためと考えられる。中学生を対象にした研究では、運動部か文化部にかかわらずそれらへ積極的に取り組むことが学校への心理的適応を促すことが報告されている(岡田, 2009)からである。また、大学生においても、部活動が人としての成長に貢献することが数多く報告されている(社団法人日本私立大学連盟, 2007)。積極的に課外活動へ参加することが学生・生徒の心理的発達に正の効果をもたらし、それは運動部と文化部の双方に認められるといえる。すなわち、運動部と文化部のどちらであっても、情熱をもち、粘り強く課題に

取り組むことが徳性の強みに関連することが示唆された。

種目の継続型と系統による日本版 VIA-IS の得点の差 男女別による種目の継続型(同一種目継続型, 異種目継続型)×系統(個人系・集団系)の二要因分散分析の結果を Table 5, Table 6 に示した。男女ともいずれの因子についても交互作用はみられなかった。男性については、種目の継続型の主効果が、「知恵と知識」($F(1, 30)=10.35, p<.001, \eta^2=.03$), 「勇気」($F(1, 30)=7.83, p<.01, \eta^2=.03$), 「人間性」($F(1, 30)=11.23, p<.001, \eta^2=.04$), 「超越性」($F(1, 30)=6.15, p<.05, \eta^2=.02$)にみられ、すべての因子で異種目継続型より同一種目継続型の得点が有意に高かった。女性については、種目の継続型の主効果が、「勇気」($F(1, 15)=5.55, p<.05, \eta^2=.04$)にみられ、すべての因子で異種目継続型より同一種目継続型の得点が有意に高かった。この結果について、同一種目を継続することで、特定の種目に対して一途に取り組むため、その種目の経験が長く、スキル

の習得や練習方法の理解が、異種目を継続する者より習熟していると考えられる。そのため、継続した種目の練習や試合においてリーダーシップを発揮する場面があり、「勇気」の「私は、人生を横から傍観者としてみているのではなく、それに全身で参加している」や「人間性」の「私は、だれにでもやり直しの機会を与えたい」といつも思っている」等の質問項目に関係することが推察される。

先行研究においては、同一種目を継続することで、特性的自己効力感が高くなること（字恵・辰本, 2016）や、結果予期が肯定的になること（富永・田口, 2014）が報告されている。結果予期と効力予期（自己効力感）は、Self-efficacy Modelとして人間が行動を起こす先行条件とされている（筒井他, 1996）ことから、男女ともに「勇気」が、加えて男性では「知恵と知識」「人間性」「超越性」が種目の継続に関係する可能性が考えられる。また、継続した種目への取り組みによる心理的変数との関係に関する報告として、西垣・小塩(2012)は情動知能測定尺度(内山他, 2001)を用いて、男性はもっとも熱心に取り組んだ種目の年数が情動知能の発達に関連すること、女性は中学校と高校の運動経験年数と熱心度が情動知能に関連し運動継続の要因であると報告している。情動知能測定尺度(内山他, 2001)の因子(自己洞察, 自己動機づけ, 自己コントロール, 共感性, 愛他心, 対人コントロール, 状況洞察, リーダーシップ, 状況コントロール)は、本研究における「知恵と知識」「勇気」「人間性」「超越性」と類似する因子と考えられる。したがって、中高同一の種目へ継続的に取り組むことが、徳性の強みのいくつかの側面を高める可能性が示唆された。

結論

研究2では、研究1で許容範囲内の信頼性と妥当性を確認した日本版 VIA-IS を用いて、徳性の強みと部活動の関係を検討した。その結果、運動部活動で同一種目を継続するスポーツキャリアパターンと徳性の強みとの正の関係性が示唆された。

本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究の限界と課題を述べる。まず、限界として2つ述べる。1つ目は、本研究において日本版 VIA-IS の信頼性と妥当性が許容範囲内であることを確認することができたが、信頼性(α 係数)と妥当

性(適合度指標)がやや低いことである。具体的には、「節度」因子の信頼性 α 係数は.58となったこと、モデルデータへの適合度指標がやや低いことがあげられる。その原因として、VIA-ISは哲学書や教典を基に徳性の強みを整理した尺度であり、哲学的に広い概念を測定していることが考えられる。なぜなら、類似した概念のみを因子分析する際は信頼性 α 係数は高い数値を示すが、広範な概念を探索的に収束させる場合は低い数値を示すことが指摘されている(柳井・井部, 2012)からである。この点について、本研究の対象者は関東地方の国立大学、公立大学の一般体育授業履修学生であったため、今後は関東以外や私立大学の学生を対象に引き続き信頼性と妥当性の検討が必要である。2つ目は、部活動経験と日本版 VIA-IS の下位因子の分散分析において、効果量(η^2)が小さい点である。効果量(η^2)の目安は、.01(小)、.06(中)、.14(大)(小塩, 2018)であり、有意差が認められる結果においても、小さな効果量であることを考慮する必要がある。

次に、本研究の課題を2つ述べる。1つ目は、別サンプルによる尺度の信頼性と妥当性の検討が必要な点である。本研究では、欧米のポジティブ心理学の先導者たちが整理した徳性の強み(VIA-IS)を日本人大学生を対象に信頼性と妥当性を検討した。今後は、私立大学を含めた幅広い学生層を対象者に尺度の信頼性および妥当性を検討していくことが望まれる。2つ目は、徳性の強みと運動部活動経験の関連について更なる検討が必要な点である。徳性の強みと運動部活動経験の関連について、因果関係の特定には至っていない。また、運動部と文化部で各因子の得点に差がみられなかった理由として、運動部と類似した性格を有している文化部の吹奏楽部(横井, 2011)に中学もしくは高校で所属した者が、56%と半数以上であったことが考えられる。なぜなら、吹奏楽部は、技術指導などにおいて先輩・後輩・OB/OGとの交流が密であり、合同演奏会などで異なる団体と交流も多い(平井他, 2012)ため、徳性の強みに関係することが予想される。そのため、運動部のみならず、文化部の雰囲気や具体的な活動経験と徳性の強みとの因果関係を特定することが必要である。

以上のような限界と課題が残されたものの、本研究において運動部活動で同一種目を継続するスポーツキャリアパターンと徳性の強みとの正の関係性を

示唆する知見を得た。また、本研究における日本版 VIA-IS の統計技法を経た信頼性と妥当性の検証結果は、わが国における徳性の強み研究の発展に寄与できるものと思われる。

引用文献

- 花田 敬一・藤善 尚憲・河瀬 雅夫 (1966). スポーツマンの性格について 体育学研究, 11, 9-16. <https://doi.org/10.5432/jjpehss.KJ00003404388>
- 橋本 公雄・中須賀 巧・西田 順一・山崎 将幸・山本 浩二 (2020). 大学体育授業で育まれる強み・長所：性差および授業種目間に着目して—性差および授業種目間に着目して— 熊本学園大学論集, 26, 61-78.
- 平井 博志・木内 敦詞・中村 友浩・浦井 良太郎 (2012). 大学期における課外活動の種類とライフスキルの関係 大学体育学, 9, 117-125. https://doi.org/10.20723/jhprd.9.1.0_117
- McGrath, R. (2015). Integrating psychological and cultural perspectives on virtue: The hierarchical structure of character strengths. *The journal of Positive Psychology*, 10, 407-424. <https://doi.org/10.1080/17439760.2014.994222>
- 森本 哲介・高橋 誠・並木 恵祐 (2015). 自己形成支援プログラムの有用性—高校生女子を対象とした強みの活用による介入— 教育心理学研究, 63, 181-191. <https://doi.org/10.5926/jjep.63.181>
- 西垣 景太・小塩 真司 (2012). 過去の運動経験が大学生の情動知能に及ぼす影響 東海保健体育科学, 34, 23-32.
- 岡田 有司 (2009). 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響—部活動のタイプ・積極性に注目して— 教育心理学研究, 57, 419-431. <https://doi.org/10.5926/jjep.57.419>
- 大竹 恵子・島井 哲志・池見 陽・宇津木 成介・ピーターソン, C.・セリグマン, M. E. P. (2005). 日本版生き方の原則調査票 (VIA-IS: Values in Action Inventory of Strengths) 作成の試み 心理学研究, 76, 461-467. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.76.461>
- 小塩 真司 (2018). SPSS と AMOS による心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで— 東京書籍
- 小塩 真司・阿部 晋吾・カトローニ, P. (2012). 日本語版 Ten Item Personality (TIPT-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40-52. <https://doi.org/10.2132/personality.21.40>
- Peterson, C., & Seligman, M. E. P. (2004). *Character strengths and virtues: A handbook and classification*. UK: Oxford University Press.
- ピーターソン, C.・宇野カオリ (訳) (2012). ポジティブ

心理学入門—「よい生き方」を科学的に考える方法— 春秋社

- Seligman, M. E. P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, 55, 5-14. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/0003-066X.55.1.5>
- Seligman, M.E.P., Steen, T.A., Park, N., & Peterson, C. (2005). Positive psychology progress: Empirical Psychologist validation of interventions. *American Psychologist*, 60, 410-421. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/0003-066X.60.5.410>
- 社団法人日本私立大学連盟 (2007). 大学生が人間 (ヒト) として成長するために—正課外教育の重要性の再認識— 株式会社双葉レイアウト
- 島井 哲志 (2006). ポジティブ心理学—21 世紀の心理学の可能性— ナカニシヤ出版
- 島本 好平・石井 源信 (2010). 運動部活動におけるスポーツ経験とライフスキル獲得との因果関係の推定 スポーツ心理学研究, 37, 89-99. <https://doi.org/10.4146/jjpsopsy.2010-067>
- 霜鳥 駿太・西田 順一・中雄 勇人 (2018). 運動・スポーツと人間の徳性としての長所との関連 日本体育学会第 69 回大会予稿集, p.104. https://doi.org/10.20693/jspehss.69.104_1
- 霜鳥 駿太・西田 順一・桜井 美加 (2018). 中学生サッカー選手が経験する心理的ストレスとその対処方略—北関東地域の J リーグ・ジュニアユースクラブ者と運動部活動者を単一事例とした検討から— 北関東体育学研究, 3, 19-26.
- 高岡 しの・佐藤 寛 (2014). 体育会男子学生のパーソナリティ—5 因子モデルに基づいた一般男子学生との比較— 関西大学社会学部紀要, 45, 279-287.
- 富永 徳幸・田口 節芳 (2014). 大学生のスポーツキャリアパターンを規定する心理的要因 近畿大学工学部紀要, 人文・社会科学篇, 44, 27-38.
- 筒井 清次郎・杉原 陸・加賀 秀夫・石井 源信・深見 和男・杉山 哲司 (1996). スポーツキャリアパターンを規定する心理的要因—Self efficacy Model を中心に— 体育学研究, 40, 359-370.
- 上野 耕平・中込 四郎 (1998). 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究 体育学研究, 43, 22-42. <https://doi.org/10.5432/jjpehss.KJ00003392058>
- 上野 雄己・小塩 真司 (2015). 大学生運動部員におけるレジリエンスの 2 過程モデルの検討 パーソナリティ研究, 24, 151-154. <https://doi.org/10.2132/personality.24.151>
- 上野 雄己・小塩 真司・陶山 智 (2018). スポーツ競技者における Big Five パーソナリティ特性と競技レベルとの関連 パーソナリティ研究, 26, 297-290. <https://doi.org/10.2132/personality.26.297>

ps://doi.org/10.2132/personality.26.3.8

- 上野 雄己・鈴木 平・清水 安夫 (2014). 大学生運動部員のレジリエンスモデルの構築に関する研究 健康心理学研究, 27, 20-34. https://doi.org/10.11560/jah.p.27.1_20
- 宇恵 弘・辰本 頼弘 (2016). スポーツキャリアパターンが特性的自己効力感の形成に及ぼす影響 関西福祉科学大学紀要, 20, 79-90.
- 内山 喜久雄・島井 哲史・宇津木 成介・大竹 恵子 (2001). EQS マニュアル, 実務教育出版
- 柳井 晴夫・井部 俊子 (2012). 看護を測る—因子分析による質問紙調査の実際— 朝倉書店
- 横井 彩奈 (2011). 部活動が与える自己効力感への影響—達成場面と人間関係に着目して— ベネッセ教育研究開発センター編「神奈川県立の公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書」, 122-132.

(受稿: 2023.4.21; 受理: 2023.8.23)
